



# 地域住民との国際共修 イの変化に着目して

## 留学生のアイデンティテ

著者	島崎 薫
雑誌名	東北大学高度教養教育・学生支援機構紀要
巻	3
ページ	227-237
発行年	2017-03
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10097/00120959">http://hdl.handle.net/10097/00120959</a>

【報 告】

# 地域住民との国際共修 —留学生のアイデンティティの変化に着目して—

島 崎 薫<sup>1)\*</sup>

1) 東北大学高度教養教育・学生支援機構

本稿では、留学生が仙台に伝わるすずめ踊りを地域住民と一緒に練習し、共に仙台・青葉まつりに参加したことを通して、どのように地域コミュニティに越境し、どのようにアイデンティティが変化したのかについて考察する。アメリカからの交換留学生ジェニーは、「仙台のコミュニティ」の外にいる「よそ者」として自己認識をしていたが、すずめ踊りや仙台・青葉まつりを通して「仙台のコミュニティ」に手段的横断かつハイブリダイゼーションの形で横断し、「仙台のコミュニティの一員」になることができた。結果、今までジェニーにとって「想像のコミュニティ」でしかなかった「仙台のコミュニティ」が、自分の帰属するコミュニティになった。合わせて、その「仙台のコミュニティ」である日本語は、「他人のことば」から「私のことば」になったようである。これが、ジェニーに自信とモチベーションを与え、彼女の学習や生活にも大きな影響を与えたことが分かった。

## 1. はじめに

日本学生支援機構の調査によると、2015年の外国人留学生の数は208,379人で、その数は近年急速に伸びている（日本学生支援機構 2016）。留学生が急速に増加する一方で、留学生が日本人との友人関係を築くことが重要だと認識しながらも、友人関係を築くことに苦勞をしていることが様々な研究でこれまでに指摘されてきている。例えば、大橋（1991）では、大学に在籍する留学生に質問紙調査を実施した結果、学部生が留学生活の上で最も重要と考えていることが「日本人の友人がいること」でありながらも、日本人の友人との人間関係に関する満足度が低く、そのギャップが大きいと述べている。倉地（1988）も大学に在籍するアジア系学部留学生に対する面接調査を実施し、多くの留学生が親しい日本人の友人を持っていないと指摘する。さらに倉地は、日本人の友人がいると質問紙に答える学生も、面接をして話を聞くと実は浅い知人であることが多いことを指摘している。

東北大学が2012年に行った留学生対象の学生生活調査でも、留学生がなかなか日本人の友人関係を広げられず、限られたコミュニティの中で生活していることが浮き彫りとなった（東北大学 2013）。図1は、学内の日本人の親しい友人の人数を聞いたものである。1

～4人と答えた留学生が約半数近くおり、0人と答えた学生も16%で、2人と答えた学生が最も多かった（17.7%）。図2は学外の日本人の親しい友人について聞いたもので、学内と比べてさらに日本人の友人の数が少ないことが分かる。0人と答えた学生が30%を占め、1～4人と答えた学生は40%である。

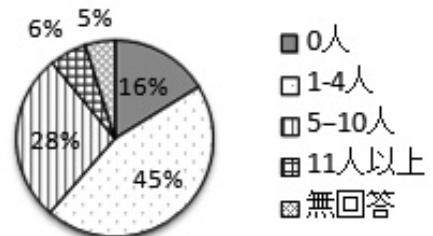


図1 学内/日本人の親しい友人

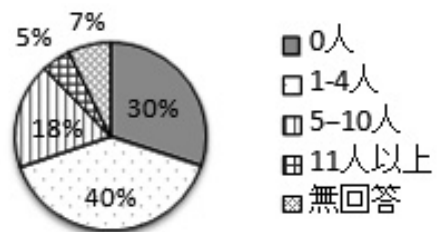


図2 学外/日本人の親しい友人

また、留学生数が増加して同じキャンパスで学んでも、受け入れ国の学生と留学生が自然に任されて

\*) 連絡先: 〒980-8576 仙台市青葉区川内41 東北大学高度教養教育・学生支援機構 k.shimasaki@m.tohoku.ac.jp

いる限り親密な交流は進まないということは、先行研究で主張されてきている（加賀美 2006 他）。そこで、本学ではキャンパスの国際化を進めるべく、留学生と日本人学生が共に学ぶ国際共修が活発に行われてきた。本稿では、学内の国際共修にとどまらず、留学生と学外の地域住民とも共に学ぶ機会を設けることで、留学生にどのような影響があり、変化があるのか考察していきたい。

## 2. 国際共修とは

本学では、学生交流の活発化、キャンパス内の国際化を進めるべく、東北大学における共通教育課程の全学教育科目の一環として、2009年から留学生と日本人学生が共に学ぶ国際共修を正式に開講し、現在に至っている（佐藤他 2011）。国際共修は、単に留学生と日本人が机を並べて、同じ科目を履修するだけではなく、意図的な教育介入により、言語・文化背景の異なる学生同士が他者を理解し、己を見直し、新しい価値観の創造を自己成長へとつなげる学習体験である（佐藤他 2011）。東北大学では、毎年50以上の国際共修の授業が日本語または英語で開講されており、異文化コミュニケーションを題材にしたものや、日本語・日本文化に関するトピックを取り上げたものなど多岐にわたる。

他大学でも国際共修という名称ではなくとも、留学生と日本人学生が共に学ぶ授業形態での実践が行われている。例えば、北海道大学では「多文化交流科目」という名前で、留学生と日本人学生が協働で取り組む問題解決型・プロジェクト型の科目が実施されている（青木・小河原 2014）。立命館大学でも「異文化交流科目」として、留学生と日本人学生が学びあえるような授業を展開し、文化や歴史など多様な異文化背景を持った学生同士のコミュニケーションを通じて、国際的な感覚を涵養することを目的とした授業が行われている（立命館大学 2016）。

本学では、学内だけに留まらず、地域コミュニティとともに行う国際共修も開講され始めている。これまで、留学生と地域との取り組みは、交流という形で行われていることが多かった。例えば、地域の小中学校に出向いて小、中学生と交流活動をするという取り組みは数多く行われているが、一時的な交流というものが多く、かつ

留学生はリソースで、小、中学生の学びの場として捉えられていることが多い（花見・橋本 2001, 大島・田村 2001, 宮本 2010など）。また留学生がゲストとして地域を訪問し、見学をさせてもらったり、インタビューをさせてもらったり、ホームステイさせてもらったりする交流活動（中島 2014, 鈴木 2000など）も多く実施されてきた。しかし、近年東北大学では、ひととき共に時間を過ごし、交流をするということだけではなく、地域の方々と協働で何かを作り上げたり、一緒に同じ目的に向かって活動したりするという地域住民との国際共修を行っている。ただ単にリソースとして相手を利用したり、利用されたり、またゲストとホストの関係で一方通行なものというだけではなく、共に取り組む同志として活動をしている。また、地域住民との国際共修の意義は、学外の日本人とより深くつながれるだけではなく、日本社会や日本文化を実際に見て触れることができるところにもある。日本人学生や留学生といった大学生だけではなく、子供からお年寄り、会社で働く人から自営業の人、退職した人などあらゆるバックグラウンドを持つ日本人と接することができ、教室の中での学びにとどまらず、街の中やお祭りの中など実際の出来事を生教材として学ぶことが可能になる。本稿では、そのような地域住民との国際共修の実施の1つにおいて、留学生のアイデンティティがどのように変化したのかを考察していく。

## 3. 本取り組みの概要

2014年から本学では留学生と日本人学生でチームを編成し、毎年5月に仙台で開催されている仙台・青葉まつりで踊られているすずめ踊りを実際に練習し、祭りに参加するという地域住民との国際共修を実施している。このプロジェクトは、東北大学の共通教育課程の全学教育科目カレントトピックス「宮城の伝統文化を通じた日本理解」の科目の中で行われている。練習の中で、留学生が地域の中に入ってすずめ踊りやお囃子を地域の人々から習ったり、大学に地域の方を招いて踊りやお囃子の講座を開いてもらったりして、地域の人々とともに練習をして、仙台・青葉まつりで一緒に演舞を披露している。このすずめ踊りプロジェクトは、表1のようなスケジュールで実施した。

表1 すずめ踊りプロジェクトスケジュール

日時	内容	周囲との関わり
2016年4月12日(火) 8:50-10:20	オリエンテーション (授業概要、仙台・青葉まつり、スケジュールの説明など)	
2016年4月14日(木) 19:00-21:00	市民講習会	地域のすずめ踊り・太鼓インストラクターからの指導 仙台市民とともに練習
2016年4月19日(火) 8:50-10:20	第1回すずめ踊り練習(必須)	地域のすずめ踊りインストラクターからの指導
2016年4月21日(木) 19:00-21:00	市民講習会	地域のすずめ踊り・太鼓インストラクターからの指導 仙台市民とともに練習
2016年4月24日(日) 10:00-12:00	第1回お囃子練習(必須)	地域の太鼓インストラクターからの指導
2016年4月26日(火) 8:50-10:20	第2回すずめ踊り練習	地域の太鼓インストラクターからの指導
2016年4月28日(木) 19:00-21:00	市民講習会	地域のすずめ踊り・太鼓インストラクターからの指導 仙台市民とともに練習
2016年4月29日(金/祝) 10:00-12:00	第2回お囃子練習(お囃子担当の学生必須)	地域の太鼓インストラクターからの指導
2016年5月8日(日) 10:00-12:00	第3回お囃子練習(お囃子担当の学生必須)	地域の太鼓インストラクターからの指導
2016年5月10日(火) 8:50-10:20	最終回すずめ踊り・お囃子合同練習(必須)	地域のすずめ踊り・太鼓インストラクター、留学生先輩からの指導
2016年5月12日(木) 19:00-21:00	市民講習会	地域のすずめ踊り・太鼓インストラクターからの指導 仙台市民とともに練習
2016年5月14日(土)	仙台・青葉まつり	
2016年5月17日(火) 8:50-10:20	振り返り	

すずめ踊りの始まりは、伊達政宗公の時代に遡る。青葉城建設の際に大阪堺から石工を呼んで作業をさせていたのだが、夜の宴の席でその石工たちが扇子を持って踊り始めたのが、最初と言われている。昭和に入り、交通事情等で途絶えてしまったものを、昭和60年に「市民がつくる市民のまつり」として復活したものが、現在に続く仙台・青葉まつりとなっている(仙台・青葉まつり協賛会 n.a.)。

2016年の仙台・青葉まつりでは、143祭連、約4000名が参加した。2016年も祭り期間中は、市街地の交通規制を全面的に行い、街の中は祭り一色となる。そこからもこのお祭りがいかに仙台の街をあげて大規模に行われ、多くの仙台市民が関わっているかが分かる。すずめ踊りのチームは祭連(ますら)と呼ばれ、地域の社会人サークルのような形で立ち上げられているものも多数あるが、それ以外に地元の小中学校で結成さ

れているもの、地元企業で結成されているものも多い。

地元の老舗デパートや銀行などの新人研修の一環として取り入れられていることも多く、すずめ踊りを通して新人の連帯感を高めるとともに、仙台の街をより深く知るきっかけともなっているようだ。社会人サークルのような形で立ち上げられているものは、仙台・青葉まつりがある春以外も、定期的に練習をし、仙台・青葉まつり以外のイベントに出ている祭連も多い。また4月から週1回市民向け講座も開催されており、いずれの祭連にも属していない市民も練習する機会を得られ、祭り本番でもいずれの祭連にも属していない人が飛び込みで踊れる時間も設けてある。踊りの内容に関しては、基本的な踊りは決まっているものの、それぞれの祭連ごとにアレンジできる箇所もあり、それぞれの祭連で独自のテクニックを披露したり、工夫を凝らしたりしている。また学校対抗の「学園天国」と呼ばれるプログラムもあり、

大学や専門学校でサークルや部活動として練習している祭連がすずめ踊りとオリジナルダンスを組み合わせ、演舞し、競い合う。東北大学も2015年、2016年と参加し、2015年には3位に当たる「マタアイマ賞」を受賞している。このように仙台・青葉まつりは、伝統を引き継ぐという要素もあるが、地域で作り上げていく祭りという雰囲気強いお祭りでもあり、誰でも参加できる広く開かれた祭りで、留学生も問題なく参加することができるものとなっている。

#### 4. 越境

この地域住民との国際共修では、留学生たちは大学の中にある自分たちのコミュニティから地域のコミュニティへとコミュニティ間を移動し、学びを深めた。こういったコミュニティ間の移動は越境と呼ばれ、「人やモノが複数のコミュニティをまたいだり、異質な文脈同士がその境界を越えて結びついたりする過程を、さらには、そこで起きる人々やモノの変容過程」と定義づけられている（香川2015: p.35）。この越境という概念は、これまで看護や企業インターンシップ、保育の分野で用いられ（香川 2012, 香曾我部 2013, 松本 2013など）、越境をすることによって起きる学びの深まりについて論じられてきた。これまでの越境に関する研究で、留学生の地域コミュニティへの越境に関して論じられてきたことはほとんどない。

香川（2015）によると、異なる文脈間をまたぐという文脈間横断には、3つのタイプがある：

##### （1）状況間移動

状況間移動では、時間的に前後するような形で複数のコミュニティや状況間を一方から他方に移動する、あるいは両者を往復する。例えば、学校から職場への移動が挙げられる。学校を卒業し、社会に出て、ある職場で働くという移動だ。看護学校であれば、座学で学んだ知識やスキルを病院という職場で活用するということになる。

##### （2）手段的横断

手段的横断とは、現在直接参加しているコミュニティや状況での目標を達成するために他の状況に手段とし

てアクセスする過程か、あるいは逆に、別の状況での目的を達成するために、ある状況に手段として参加する過程を意味する。例えば、営業の部署の人が顧客に今まで以上に詳しい商品説明を行うために一定期間工場と一緒に働き、商品の仕組みを学び、その後営業職に戻って、工場で得た知見を生かし、顧客により詳しく商品について説明できるようになるだろうし、商品についてわからないことがあれば、工場と一緒に働いた際に知り合った人たちに質問することもできるだろう。

##### （3）ハイブリダイゼーション

ハイブリダイゼーションは、異質な文化が同じ時間や場所で交わり、新たな実践や物や知識を創造していく過程である。例えば、地域の商店街と大学のゼミが共同で地域活性化のプロジェクトに取り組み、これまでの商売の実績と、若者ならではの新しい視点、学術的な理論など様々な異質の文化や実践が交じり合い、そこで新しい取り組みが生まれるというのが例として考えられる。

香川（2015）は、これらの3つのタイプを列举した上で、これらのタイプは実際の場合、複合して起こるということを強調している。例えば、地域の商店街と大学のゼミとの協働プロジェクトにおいて、地域の商店街の店主にとっては日頃の商売の状況からプロジェクトの状況への状況的移動であるし、大学生にとっても同じことが言える。また、商店街の店主にとっても、大学生にとっても、この協働プロジェクトを手段として、ここで得られた知見を日頃の商売や学業に役立てていくということも考えられる。

また越境では、アイデンティティの変化を伴い、かつアイデンティティの変化は重要な役割を果たすとされている（青山 2015）。しかし青山（2015）では、越境する中で、具体的にどのようなアイデンティティの変化が起きるのか、それが学びにどのような影響を与えられるのかまでは述べられていない。

そこで本稿では、留学生が地域コミュニティにどのように越境し、どのようにアイデンティティが変化したのかについて考察していきたい。

## 5. データ収集

本研究でのデータ収集は、参加した留学生からと地域住民から行った。まず、留学生に関しては、プロジェクト期間中の参与観察と祭り終了後に留学生が提出したレポートから行った。必要に応じてレポートをもとにフォローアップの質問をメールでやりとりした。今回はプロジェクトに参加していて、レポートでアイデンティティの変化について詳しく言及していた1名の留学生、ジェニー<sup>1</sup>に焦点を当てる。

ジェニーは、アメリカからの交換留学生で、本学には、1年間交換留学生として在籍した。Exchange<sup>2</sup>と呼ばれる、教授言語が英語の文系学生対象のプログラムに参加した。特に日本に関係のあるリベラルアーツを英語で学べ、日本語もしっかり学べるプログラムになっている。このことから、このExchangeに來ている学生は、このプログラム専用<sup>3</sup>に開講された科目を履修することになっており、ほぼ同じプログラムの学生と毎日授業を一緒に受けることになっている。また、日本語のクラスも初心者に関しては、Exchange専用のクラスとなっており、すべてのクラスメイトはExchangeに所属している学生である。日本語科目が必修のため、プログラムの中で週4コマ、計6時間日本語を学ぶことになっている。ジェニーは、日本語初心者で来日した。このプログラムではフィールドトリップやフィールドワークが多く含まれ、より実践的なカリキュラムとなっており、教室の外でも同じプログラムの他の学生と交流を深められるものになっている。さらに、日本人学生の支援団体があり、このプログラムの交換留学生の仙台での生活や大学での勉強・研究をサポートし、より充実した学生生活を送れるように支援しており、この日本人学生たちとの交流も大変活発である。このことから、Exchangeは、他の交換留学プログラムや学位取得プログラムに比べると、学生同士が非常に親密である。

次に、地域住民についてであるが、踊りとお囃子のインストラクターとして、東北大学の学生に指導をしてくださった地域住民の皆さんからのアンケートやその方々と筆者とのメールでのやり取り、留学生たちが地域の練習や仙台・青葉まつりに参加した際の様子を参与観察したものをデータとした。踊りのインストラ

クターは3名おり、3名とも長くすずめ踊りに携わっており、すずめ踊りの親善大使である伊達の舞という祭連でも活躍している。中でも、リーダー的存在の村上さん<sup>3</sup>は、留学経験があり、外国人とのコミュニケーションや英語での意思疎通でも全く問題ない人物であった。また仕事も国際交流関連のことをされており、仙台に住む外国人と接することにも非常に慣れている。東北大学が仙台・青葉まつりに参加するようになってから、インストラクターとして指導してくださっている。お囃子のインストラクターの皆さんは、和太鼓を演奏する社会人サークルで、長年活動をされ、様々なイベントで演奏されており、仙台・青葉まつりでも誰でも参加できる踊りのプログラムでのお囃子を長年担当されている。この和太鼓の団体の副代表の鈴木さん<sup>4</sup>は、本学で長年留学生の支援をボランティアでされており、そこで筆者と知り合い、留学生の太鼓の指導をお願いすることになった。そのため、鈴木さんは普段から留学生や外国人に接することに慣れているし、留学生と親しくなりたいと思っている方である。

## 6. ジェニーのアイデンティティの変化

ジェニーは、すずめ踊りに参加する前の自分のことをレポートで次のように述べていた：

Most days, I feel like I live in a strange, isolated bubble. As an exchange student, I'm technically a student at Tohoku University but I honestly don't interact with other, "real" students and nothing in Exchange really encourages it. And although I live, shop, and study here, I really never feel like I belong here. You never get used to being stared at while you're trying to buy groceries, or people actively avoiding being near you. It's an odd sort of half-life to live.

仙台で生活する大半は、不可思議な孤立している泡の中に住んでいるような気がしていた。交換留学生として、手続き上は東北大学の学生なんだけれども、正直に言って他の人

たち、つまり「本当の」学生とやりとりすることはないし、Exchangeのプログラムにはそういった機会はなかった。私はここに住み、買い物をし、勉強をしているのだけれども、私がここに属していると感じることは本当に一度たりともなかった。日用雑貨を買おうとしている時に、人からじろじろ見られること、あからさまに人から避けられることに慣れることはなかった。半分だけ生きているような、そんな変な感じだった。

\*交換留学プログラムの名前は筆者が仮名に変更した以外は英語原文ママ。訳責筆者。以下同様。

フォローアップのメールでは、ジェニーは自分のことを次のように語っている：

I really felt like an outsider, not like someone who actually lived and studied in Sendai.

私は、自分は実際に仙台で生活をし、勉強をしている人じゃなくて、まるでよそ者のようだと感じていた。

Exchangeの活動で観察されるジェニーは、内気で、研修旅行などでも一人でいることが多い学生だった。Exchangeでは、交換留学生が自分の母国の言葉や文化を毎週1回1時間決まった曜日の時間に教えるというプロジェクトがあり、多くの交換留学生が喜んで参加していた。彼女が在籍していた年は、その交換留学プログラムに彼女以外の英語のネイティブスピーカーがおらず、取りまとめをしていた日本人学生が何度かジェニーに参加をお願いしたが、ジェニーは最後まで首を縦に振らなかった。

その一方、すずめ踊りの練習にはとても熱心に参加していて、グループで考える学校対抗プログラム「学園天国」用のオリジナルダンスにも積極的に関わっていた。スケジュールから見てわかるように、短期間で集中的にすずめ踊りを習得し、お祭りに参加するというスケジュールになっている。4月に来たばかりの交

換留学生も多く、慣れない中での練習となる。オリジナルダンスは国際共修のクラスを5つのグループに分け、各グループ持ち時間15秒で、各グループ選曲から振り付けまで行い、本番では5グループの15秒ダンスを繋げて披露した。オリエンテーションで学校対抗のプログラム「学園天国」の説明をし、2週間後の4月26日の練習で各グループ見せ合うことになっていた。ほとんどのグループが完璧ではなくとも、選曲、振り付けをし、全員がなんとか踊れるレベルになって、クラスで踊りを披露した。しかし、ジェニーのグループは、非常に振り付けの難しい曲を選んでしまい、一応途中まで振り付けはしたようだが、全員で相談をしなかったようで、分かっていないメンバーもあり、4月26日のクラスで見せる際に最後まで踊ることはできなかった。そのことが悔しかったのか、ジェニーのグループのリーダーが泣き出してしまった。ジェニーはそばでそのリーダーの学生を励まし、リーダー一人のせいじゃない、まだ時間はある、みんなで一緒に考えればできると声をかけていた。

また授業外の練習でもジェニーは地域の練習会にオリエンテーションの翌週から参加し、そこから仙台・青葉まつり本番まで3回すべて参加した。地域の人たちに混じって一生懸命踊りを練習していた。

彼女はこのころの精神状態について、フォローアップのメールで次のように説明してくれた：

I was getting better by the time the spring semester arrived, but I was still struggling with all these doubts.

春学期が来た時までには、状況はだいぶ良くなっていただけれども、それでもなお不信任に苛まれていた。

そして、仙台・青葉まつりに参加した後のことをレポートに次のように書いている：

That all changes when I go to festivals. There, I'm one of hundreds, maybe even thousands, celebrating a common idea like love or community.

それら（仙台への帰属感がなかったことや、孤立しているように感じていたこと）は、仙台・青葉まつりに参加したことですべて変わった。そこでは、私は愛情やコミュニティなどそんな同じ考えと一緒に分かち合い、喜びあう何百人、いやおそらく何千人の一人だった。

\*括弧内は筆者加筆。以下同様。

I adored that these experiences allowed me to feel like I was really a part of Sendai's community.

これらの経験（すずめ踊りを地域住民とともに練習したことや仙台・青葉まつりに参加したこと）によって、私は自分が本当に仙台のコミュニティの一員なのだと感じる事ができたことを心からありがたく思っている。

コミュニティの一員として感じる事ができた理由をフォローアップのメールで次のように説明してくれた：

When we danced in the festival, and I was surrounded by Sendai's citizens who were all smiling and laughing with me, I really felt like I had made the right choice in coming to Tohoku University.

仙台・青葉まつりで踊って、私と一緒に笑顔で、そして楽しそうにしている仙台の人たちに囲まれて、私にとって東北大学に来るというのは、正しい選択だったんだと心から感じる事ができた。

すずめ踊りでは仙台・青葉まつりに参加しているすべての踊り手、お囃子は法被を着る。そして、すずめを模して鼻筋に白粉で線を引き、目尻に口紅で赤い線を引く。さらにそれぞれの祭連ごとで法被の色が違い、化粧も少しずつ異なる。踊りに関しても、基本の踊りは決まっているが、そこから各祭連がアレンジを加えることもできる。街全体が一体感を持ち、法被ごと

それぞれの統一感を持つ雰囲気となる。このような雰囲気が、彼女に仙台のコミュニティの一員としてのアイデンティティをもたらす一助となったのかもしれない。

またコミュニティの一員として感じた経験は、彼女の学習にも影響を与えた。フォローアップのメールで次のように説明してくれた：

Because of that realization, I felt much more confident in my studies and my own Japanese skills. I became more confident in going out and exploring the city and things like that. I really feel like, in those last months, I really enjoyed the most out of my study abroad session. So now I'm more sure than ever that I want to come back to Japan and I want to keep studying Japanese and get even better.

それ（東北大学に留学したことは正しい選択だったということ）に気づくことによって、私は自分の勉強や日本語の能力にもっと自信が持てるようになった。外に出たり、街中に行ったりするときも、自信を持って行動できるようになった。そして私の留學生活の最後あたりは、私の留學生活の中で一番楽しめた時間だった。今は日本にまた行きたいという気持ちの方が今までよりも確かだし、日本語の練習を続けて、もっと上手になりたいと思っている。

## 7. 地域住民から見た留學生の越境

越境は、誰の目線で語るのかが大きな意味を持つと香川（2016）が指摘しているように、越境は越境する側の人間だけの問題ではない。越境をする人間がいれば、当然それを迎え入れる側の人間がいる。ここでは、留學生を迎え入れてくれた地域住民の受け止め方について見ていきたい。

留學生にすずめ踊りを教えてくれた地域のインストラクターの方から、仙台・青葉まつり後のお礼のメールのやり取りで、次のような内容があった：



舞台、流しともに留学生のお友達であろう外国人の方が、青葉祭りを見に来てくれるようになって、観客に外国人が増えてきたのは東北大学チームのおかげだと思います。東北大学の紫の法被もだんだん祭に馴染んできましたね。

村上さんは、長年仙台・青葉まつりに参加し、これまでの仙台・青葉まつりをとてもよくご存知な人物である。その彼女の東北大学が参加したことによる変化に対する気づきである。

またお囃子の指導で関わってくださった和太鼓のチームの方々からは、留学生との交流について事後アンケートで次のようなコメントをもらった（原文ママ）：

・去年に引き続き2回目の参加です。親子ともども留学生の皆さんと交流する場があることが、異文化交流を自然に行えて嬉しく思っています。また、和太鼓団体の一員としては留学生に太鼓に興味をもってくれる方が多く、青葉祭が終わってからも交流が続いているのがありがたいです。

・留学生のみなさんが日本の、そして仙台の文化に興味を持って積極的に参加してくれる事にこちらとしても喜びを感じます。みんなが楽しんでいる姿に我々も元気をもらえるし、刺激になるので、また今後共関わらせて頂ければ嬉しく思います。

この和太鼓の団体自体の雰囲気も留学生と関わる事に当初からとても前向きだったこともあり、最後のコメントも非常にポジティブなものが多かった。また、複数回和太鼓の練習を重ね、指導して下さっていることから、留学生とも関係構築ができ、ソーシャルネットワークサイトやEメールなどで引き続き交流をしているようである。

しかし、この踊りとお囃子の指導の方々のように留学生や外国人とのコミュニケーションに慣れており、最初から何の抵抗もない方々ばかりだったわけではな

い。市民向けに開講されているすずめ踊り講座に留学生が参加したいという話をしに行った際は、仙台・青葉まつり事務局の方々は非常に好意的に受け止めてくださったが、実際の市民講座をされている方は、当初はとても戸惑われていた。これまで外国人の参加がなかったようで、留学生が参加する際には、必ず引率して通訳してほしいとお願いされた。宮城県は、東日本大震災の影響もあり、都市の大きさの割に外国人がとても少ない傾向がある。在留外国人の人数を見ると、2015年は17,708人で、日本全体の在留外国人数2,232,189人のたった0.8%である（法務省 2016）。なかなか日常生活で外国人と接することがない地域住民の方々にとって、ことばの通じない留学生が練習に交じることで戸惑ってしまうのは、当然のこととも言える。

だが、実際講座が始まってみれば、仙台・青葉まつりがあらゆる人たちに開かれたお祭りであり、様々な人たちがこれまでにすずめ踊りを踊ってきたこともあり、すぐに打ち解けた。踊りの練習の合間には手ぬぐいの巻き方、帯の縛り方を指導して下さり、身振り手振りで説明をして下さって、最後に実際に頭に手ぬぐいを巻いた姿に「クール！」と親指を立ててにっこりと笑ってくださった。それを見ていた留学生も拍手をしたり、歓声をあげたりして、通訳なしでも十分なコミュニケーションが成り立っていた。仙台・青葉まつりでも、この講座に参加した市民の方々が、会場で会えば手を振ってくださったり、声を掛けてくださったりした。

## 8. アイデンティティの変化と越境

ジェニーは、このすずめ踊りのプロジェクトに参加し、仙台・青葉まつりに参加するまで、自分自身のことを「手続き上の東北大学の交換留学生」と位置づけ、まるで仙台で生活もしていなければ、仙台で勉強しているわけでもないかのような「よそ者」と位置づけていた。ジェニーが考えている「仙台のコミュニティ」からは、じろじろ見られたり、避けられたりしているように感じ、そもそも文脈間の横断すらできない、相手のコミュニティに拒否されていると感じていた。市民向け講座へ留学生の参加の話をした時にも、ことばの通じない外国人の参加は初めてのことで、戸惑って

いらっしゃる様子を感じた。そこからもやはり、留学生、外国人と地域住民の間に壁とまではいかないが、今まで接する機会がなかった故の隔たりがあったと言える（図3）。

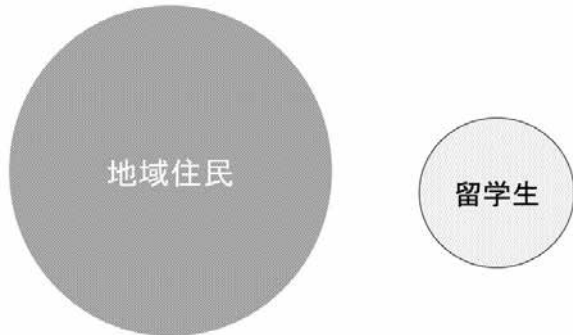


図3 地域住民と留学生のコミュニティの隔たり

当初は筆者が通訳として間に入ったり、留学生や外国人に慣れているインストラクターが基本を教えたり「仲介者」が介在することで、地域住民や地域の伝統と留学生をつないでいたが（図4）、練習を重ね、地域の人たちとともに同じ目的に向かって取り組む中で、「仲介者」を介することなく、市民講座に参加している地域住民やインストラクターとコミュニケーションをとりながら、練習することができた。確かに数回の練習であり、完全にそのコミュニティで暮らしたり、働いたりするわけではなかったが、同じ目標に向かってともに参加したという点では、新たな実践を創造していたといえるのではないだろうか。あらゆる人に開かれた仙台・青葉まつりに参加することを通して、困難だった文脈横断を容易にすることができ、地域の輪の中に入ることができた。この文脈横断は、すずめ踊りを習うために地域のコミュニティに参加したという点で、手段的横断とも言えるし、地域住民とともに練習をして仙台・青葉まつりを盛り上げて行ったという点でハイブリダイゼーションとも言えるだろう（図5）。

そしてジェニーは、すずめ踊りをしている地域のコミュニティに越境することで、「仙台のコミュニティの一員」としてのアイデンティティを獲得することができた。そのアイデンティティの変化により、日本語の学習やその他の交換留学プログラムでの学習に自信が持てるようになるとともに、今まで仙台で生活する

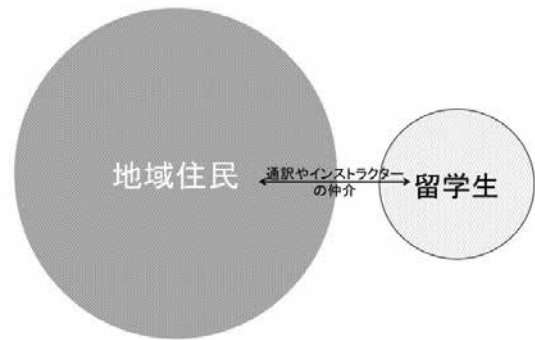


図4 仲介者でつながる地域住民と留学生のコミュニティ

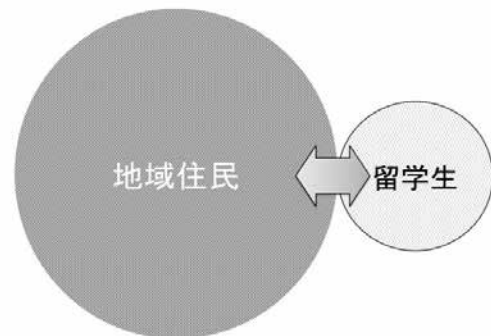


図5 留学生が地域住民のコミュニティ越境

ことに関しても疎外感を感じていたのが、その疎外感がなくなり、自信を持って過ごせるようになった。

ジェニーが仙台・青葉まつりに参加する前までは、自分自身は、仙台で生活を営む人たちや日本人学生とは別のところにいると位置づけていた。そのときのジェニーにとっての仙台で生活を営む人たちや日本人学生たちのコミュニティ「仙台のコミュニティ」は、「想像のコミュニティ (imagined community)」(Kanno and Norton 2003) であった。「想像のコミュニティ」とは、即座に接することができず、アクセスすることもできないコミュニティで、私たちの想像力でのみ繋がることのできる人々のグループである (Kanno and Norton 2003)。これは Wenger (1998) で述べられているような、実際に接することができる確かな関係性の中でのコミュニティの実践への直接的な参加や、そのコミュニティへの貢献だけがコミュニティに所属しているということを意味しているのではないという考えに基づいている。

ジェニーの場合は、Wenger (1998: p.164) が提唱しているような「非参加」が彼女のアイデンティティを作

り出している。私たちは必ずしも実践に関わることでアイデンティティを形成しているわけではなく、関わらないということでもアイデンティティを形成しているのだ (Wenger 1998)。つまり、ジェニーは想像のコミュニティである「仙台のコミュニティ」に非参加である自分というところからアイデンティティを形成していた。そのときは日本語という言語は、仙台で生活を営む人たちや日本人学生たちのことばであり、ジェニーにとって「他人のことば」であったと考えられる。

仙台・青葉まつりの後は、自分が想像していた「仙台のコミュニティの一員」になることができ、ジェニーが想像していたコミュニティが自分が所属するコミュニティとなった。それと同時に、そこで使われている日本語は、「他人のことば」から「私のことば」に変化したのではないだろうか。

「仙台のコミュニティ」の外にいるときは、その内にいる人たちとはやりとりすることがないので、そこで使われている日本語という「他人のことば」を使う意義も、意味もなかったが、ジェニーにとって「仙台のコミュニティ」に越境し、自分のコミュニティと認識できるようになった時点で、そこで使われている日本語もコミュニケーションの手段として彼女にとって「私のことば」になり、意味をなすものになった。それによって、彼女は日本語を使うということに自信を持ち、さらにアメリカに帰った後も日本語の勉強を続け、上達して日本にまた来たいと考えているのではないだろうか。

## 9. まとめ

本稿では、アメリカからの交換留学生、ジェニーが地域コミュニティに入り、地域住民と同じ目的に向かって共に取り組むことによって、どのような変化があったのかについて考察した。ジェニーがすずめ踊りの練習や仙台・青葉まつりへの参加を通して、どのように地域コミュニティに越境し、どのようにアイデンティティが変化したのかについて議論した。文脈を横断することに困難があったものの、手段的横断かつハイブリダイゼーションの形で横断することで、ジェニーは新しいアイデンティティを獲得した。「仙台のコミュニティ」の外にいる「よそ者」として自己認識をしていたが、すずめ踊りや仙台・青葉まつりを通し

て、「仙台のコミュニティの一員」になることができた。それによって、今までジェニーにとって「想像のコミュニティ」でしかなかった「仙台のコミュニティ」が、自分の帰属するコミュニティになった。合わせて、その「仙台のコミュニティ」のことばである日本語は、「他人のことば」から「私のことば」になったのではないだろうか。これが、ジェニーに自信とモチベーションを与えた。ジェニーは、地域のコミュニティに越境したことで、新しいアイデンティティを得、それが彼女の学習や生活に大きな影響を与えたことが分かった。

本研究において、考察できなかったことも多い。ジェニーの越境のプロセスに関して詳しいデータ収集を行っていないため、なかなか文脈を横断することができなかったことは、データから分かったが、越境の中での彼女の異文化への葛藤や戸惑いまでは、分析することができなかった。また、このプロジェクトには50名程度の留学生が参加した。地域のコミュニティへ越境し、活動する中で、それぞれに異なる越境の形や影響があったのではないかと思う。香川 (2015) でも、越境のプロセスは十人十色であると述べられている。ジェニー以外の様々な留学生の越境によるアイデンティティの変化、越境のプロセスも考察していく必要がある。日本人学生のこのプロジェクトを経ての変化も、分析し、議論していく必要がある。そして、地域住民との国際共修は、様々な実践が考えられる。例えば、本学では仙台の老舗デパートと一緒に、外国人観光客を呼び込むにはどうしたらいいかともに考えるPBL型の国際共修を行っている。そこでは、このすずめ踊りの取り組みとは違った、留学生の変化が見られるかもしれない。様々な実践での地域住民との国際共修について調査していく必要がある。

## 注

- 1) 仮名である。
- 2) 仮名である。
- 3) 仮名である。
- 4) 仮名である。

## 参考文献

青木麻衣子・小河原義朗. 2014. 「多文化交流科目」の開

- 発経緯と意義および課題”. 北海道大学留学生センター紀要. 第18号, 3-17.
- 花見慎子・橋本顕彦. 2001. “小学校における国際理解教育と留学生交流”. 三重大学留学生センター紀要. 第3号, 25-40.
- 法務省. 2016. “平成27年末現在における在留外国人数について（確定値）”. 法務省. <http://www.moj.go.jp/content/001178165.pdf>. (2017-1-25).
- 加賀美常美代. 2006. “教育的介入は多文化理解態度にどんな効果があるか—シミュレーション・ゲームと協働的活動の場合—”. 異文化間教育. 第24号, 75-91.
- 香川秀太. 2012. “看護学生の越境と葛藤に伴う教科書の「第三の意味」の発達：学内学習 - 臨地実習間の緊張関係への状況論的アプローチ”. 教育心理学研究. 第60号 (2), 167-185.
- 香川秀太. 2015. “「越境的な対話と学び」とは何か—プロセス, 実践方法, 理論”. 越境する対話と学び. 香川秀太・青山征彦編. 新曜社, pp.35-64.
- Kanno, Y., & Norton, B. 2003. Imagined communities and educational possibilities: Introduction. *Journal of Language, Identity, and Education*. 2 (4), 241-249.
- 香曾我部琢・松延毅. 2014. “公立保育所保育士の成長プロセスと実践コミュニティ：グラウンデッド・セオリー・アプローチ（GTA）と複線径路・等至性モデル（TEM）の比較から”. 宮城教育大学紀要. 第48号, 167-180.
- 倉地暁美. 1988. “学部私費留学生の実態— 86年度生面接調査の概要と留学生教育の課題”. 立命館国際研究. 第1号 (1), 170-186.
- 松本雄一. 2013. “実践共同体における学習と熟達化”. 日本労働研究雑誌. 第55号, 15-26.
- 宮本美能. 2010. “「小学校外国語活動」のカリキュラム案とその実践—学習の方法, 内容, 環境について考察する”. 多文化社会と留学生交流. 第14号, 71-80.
- 中島祥子. 2014. “多文化間プロジェクト型協働学習における留学生の学び—留学生と日本人学生がともに地域を学ぶプロジェクトから—”. 鹿児島大学教育学部研究紀要. 人文・社会科学編. 第65号, 133 -148.
- 日本学生支援機構. 2016. “平成27年度私費外国人留学生生活実態調査概要”. 日本学生支援機構. [http://www.jasso.go.jp/about/statistics/ryuj\\_chosa/\\_\\_icsFiles/afildfile/2016/12/02/ryujchosa27p00.pdf](http://www.jasso.go.jp/about/statistics/ryuj_chosa/__icsFiles/afildfile/2016/12/02/ryujchosa27p00.pdf). (2017-1-25).
- 大橋敏子. 1991. “留学生オリエンテーションの課題— 二つの実態調査から”. 異文化間教育. 第5号, 49-65.
- 大島まな・田村知子. 2001. “留学生を活用する国際理解教育の内容・方法と教育効果に関する研究（その1）：大学周辺地域の小学校との国際交流活動を中心に”. 生涯学習研究センター紀要. 第6号, 59-80.
- 立命館大学. 2016. “異文化交流科目区分”. 立命館大学. <http://www.ritsumei.ac.jp/liberalarts/international/intercultural/>. (2016-12-12).
- 佐藤勢紀子・末松和子・桐原健真・曾根原理・上原聡・福島悦子・虫明美喜・押谷祐子. 2011. “共通教育課程における「国際共修ゼミ」の開設—留学生クラスとの合同による多文化理解教育の試み—”. 東北大学高等教育開発推進センター紀要. 第6号, 143-156.
- 仙台・青葉まつり協賛会. n.a. 「仙台・青葉まつりとは・・・」 < <http://www.aoba-matsuri.com/kikaku/archives/56/> > (2016年12月12日閲覧).
- 鈴木潤吉. 2000. “地域の国際交流での学びとは？—赤井川村での留学生ホームステイにおけるホストと留学生の反応から—”. 僻地教育研究. 第55号, 115-124.
- 東北大学. 2013. “東北大学留学生学生生活調査”. <http://www.fgl.tohoku.ac.jp/downloads/symposium/survey2012.pdf>. (2016-12-12).
- Wenger, E. 1998. *Communities of Practice: Learning, Meaning and Identity*. Cambridge: Cambridge University Press.

\* 本研究は、東北大学大学改革強化推進補助事業「地域の人々とともに体験しながら学ぶ国際共修授業のモデル開発」事業の一環である。

\* 本事業は、「公益財団法人中島記念国際交流財団助成」から支援をいただいた。